

<純 子ども基金の設立>

「純が生きた証を残したい。その純の代わりに子どもたちを支援したい」と願う純さんの母親によって、事故の賠償金を充てて今回の基金は設立されました。父親も以前から関わりがあったNPOを通じて、カンボジアでの教育支援プロジェクトに寄付を行っています。

悲痛な事故からちょうど6年の前日、事故の起きた現場には「じゅんじゅん、20歳おめでとう」と書き添えられた同級生からの花束が置かれていました。好きなことに一生懸命で、純粋の「純」の字にふさわしく、輝くような日々を駆け抜けた純さん。その姿は生き生きと、いまも家族や同級生の心の中に在り続けています。



学校の課題では大好きな昆虫を生き生きと描いた

<純 子ども基金の概要>

純 子ども基金は、経済的に困難な状況にある子どもたちの学び、発育、食、住まい等の確保に取り組む団体を支援するために設立されました。純 子ども基金は、純さんのルーツである千葉県と福島県に主たる事務所をおく団体を対象に、資金支援とメンタリング・サポートの両面から、継続的に団体を応援するものです。活動団体の組織基盤を強化し、子どもたちが健やかに、心豊かに成長できる環境づくりを進めることを目的としています。

純 子ども基金



JUN KUNITA

August 29, 1996 — August 30, 2010

公益財団法人
パブリックリソース財団



〒104-0043 東京都中央区湊 2-16-25 ライオンズマンション鉄砲洲第3 202号

Phone 03-5540-6256 Fax 03-5540-1030

URL <http://www.public.or.jp>

<http://www.giveone.net> (オンライン寄付サイト Give One/ ギブワン)

「可愛くて仕方ない」末っ子

1996年8月29日、純さんは3人兄弟の三男として千葉県印西市で生まれました。

長兄とは8歳、次兄とは6歳の年齢差がある純さん。誕生の当日、助産院では家族全員が揃って生まれてくるのを今か今かと待っていました。ようやく産声をあげたのは、兄2人が待ちくたびれて眠ってしまった23時46分。母親の誕生日の1週間前でした。

「ぼくが生まれてきたとき、くびにへその緒がまきついていたので、お父さんが貧血になったそうです」

(純さんの作文より)

出産に立ち会った父親を驚かせはしたものの、3290グラムの背が高く元気な赤ちゃんでした。

純さんの両親は、若い頃に青年海外協力隊に参加したことがきっかけで結婚。母親は看護師として障がい者施設や保育園などで勤務してきました。会社員の父親は、子煩悩で家事にも積極的。夫婦で地域の学童クラブ設立にも尽力しました。そんな心温かで芯のある両親に見守られながら、純さんはのびのびと成長します。

「3人目で育児に慣れていたので、純が何をしても焦らずに楽しめた」と言うように、子育ての喜びを両親に最も教えてくれたのが純さんでした。歳の離れた兄にとっても、小さな弟は「可愛くて仕方ない」存在。純さんが加わって、家族の絆は一段と強くなります。



セロハンテープで器用に自作したクワガタ

末っ子らしく、天真爛漫だった純さん。保育園では「登園してから道具を片付けるまで、他の子より時間がかかって…」と見ている母親が心配するほどのマイペ

ースぶりを発揮。しかし、その大らかな性格のおかげで、たくさんの友達に囲まれて楽しい毎日を過ごします。そんな純さんが、小さい頃から大好きだったのが昆虫でした。小学校の先生や友達から「虫博士」と呼ばれるほど詳しく、カブトムシが集まる木が伐採されたときには、悔しくて泣き続けたことも…。少し大きくなると、年下の子のために昆虫を採ってあげるようになり、父親を通じてクワガタを譲った子からは、会ったことがないにも関わらず「クワガタのおにいちゃん」と慕われるほどでした。なんでも興味をもったことに真っ直ぐな純さんは「ものづくり」も好きで、セロハンテープを使った昆虫の模型づくりに夢中になっていた時期もありました。

輝きながら、駆け抜けた人生

中学生になると、少しずつ大人びた表情も見せるようになります。年頃なりの反抗期も迎えましたが、母親が帰宅すると、見様見真似で料理を作ってくれていることもありました。中学校では陸上部に入り、中長距離走の練習にも励みます。クラスメートから見た純さんは、「ダジャレ全開で、みんなを笑わせることが大好きなムードメーカー」。合唱祭では、パートリーダーとしてみんなをまとめる役割も任されていました。部活やクラスの仲間たちと心から笑い、ふざけ合って過ごした時間は、純さんのかけがえのない青春の日々を楽しく彩ったはずでした。

その頃、純さんが熱中していた趣味は「野菜づくり」でした。もともと生き物を育てることが好きだった純さんには、保育園で先生と野菜を育てた記憶が残っていたのでしょう。知り合いの畑をひと畝借りて、大根、トマト、ゴーヤやオクラなどを一生懸命に育てました。食べきれないほどの野菜を持って帰ってくる純さんの顔は、いつも嬉しそうにキラキラと輝いていました。

小学校の卒業文集には、「一番興味を持っている仕事は、人が使ってくれる物をつくる機械関係の仕事です。僕はもともと『ものづくり』も好きだったので、『理科+ものづくり』で機械を造る仕事を自分の夢にしました」と書いていた純さん。

中学2年生になって高校進学について考えるようにもなり、まさにこれから将来に向けての夢を具体的に描きだすところでした。

しかし、その夏休みに純さんは突然の交通事故によって還らぬ人となります。自転車で歩道を通行中、側道から一時停止不履行の自動車が飛び出してきたのです。2010年8月30日、14歳の誕生日翌日でした。両親が用意した誕生日ケーキをひと口も食べることなく、純さんは無限に開かれていたはずの未来を抱えたまま旅立ちました。

葬儀会場に置かれた純さんが大切に育てていたオクラは、告別式の朝、小さな花を静かに咲かせていました。



畑で収穫した立派な大根を手に、誇らしげな表情



葬儀会場に飾られた純さんのオクラは、告別式の朝、小さな花を咲かせた